

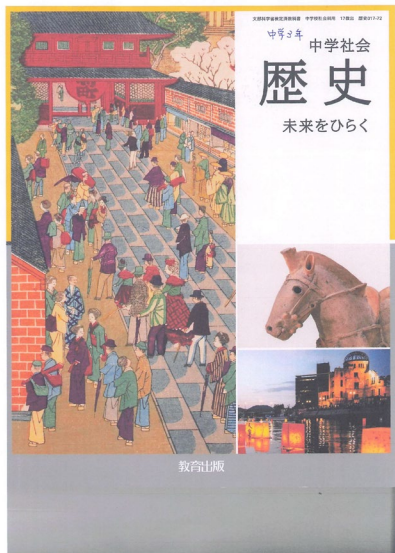
北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議 R8.6.20(土)

AIやVRなどのデジタル技術を活用した 「元島民の体験証言及び応答装置」の必要性について



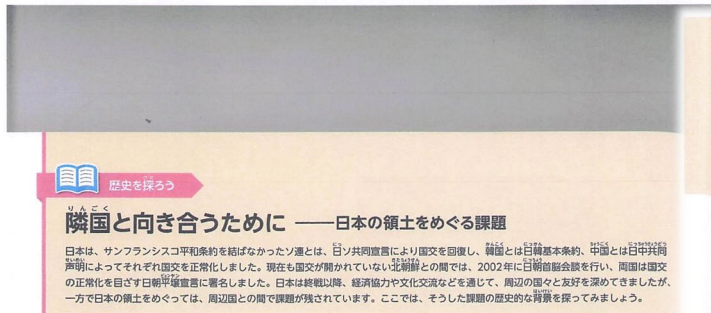
シコタンキンボウゲ

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟 参事 兼 千島会館館長
千島歯舞諸島居住者連盟根室支部 事務局長 園 田 達 弥



1. 根室管内の小・中学校、義務教育学校で使われている教科書

【中3歴史】



北方領土(北海道)

日本とロシアは、1855年に日露通好条約を結んで国交を開くとともに、両国の国境を確認し、択捉島以南を日本領、ウルップ島以北をロシア領と定めました(一p.158)。その後、樺太群島、色丹島、歯舞島・択捉島の北方領土は、日本固有の領土として統治されました。

しかし、第二次世界大戦中の1945年8月9日、当時まだ有効だった日ソ中立条約を破って日本に対して参戦したソ連は、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方領土に軍隊を送ってこれらの島々を占領し、その後も不法な占領を続けました。終戦時、北方領土にはおよそ17000人の日本人が漁業などを営んで生活していましたが、これらの人々は強制的に退去させられました。

1956年に日ソ共同宣言が調印されましたが、北方領土をめぐる意見が一致せず、平和条約を結ぶことはできませんでした。日本政府は、ソ連(現在はロシア連邦)に対して領土

竹島(島根県)

竹島は、日本海に位置する女島(東島)や男島(西島)などからなる群島で、日本固有の領土です。竹島では、江戸時代の初めから、朝鮮の商人があしかがねの採掘を行っていました。1900年代にあしかがねが本格化すると、1905年、日本政府は竹島を島根県に編入することを閣議決定しました。

第二次世界大戦後、サンフランシスコ平和条約の作成段階には、韓国は「日本が放棄する地域として、竹島も加えてほしい」とアメリカ国務長官に求めましたが、「この島は、かつて朝鮮によって領有権の主張がなされたとは見られない」として、韓国の主張は否定されました。しかし、韓国の李承晩大統領は、1952年に「海洋主権宣言」を行い、いわゆる「李承晩ライン」を一時的に設定して、竹島を韓国に取り込みました。さらに韓国は、1954年から島根県に警備隊を常駐させて、不法な占拠を続けています。



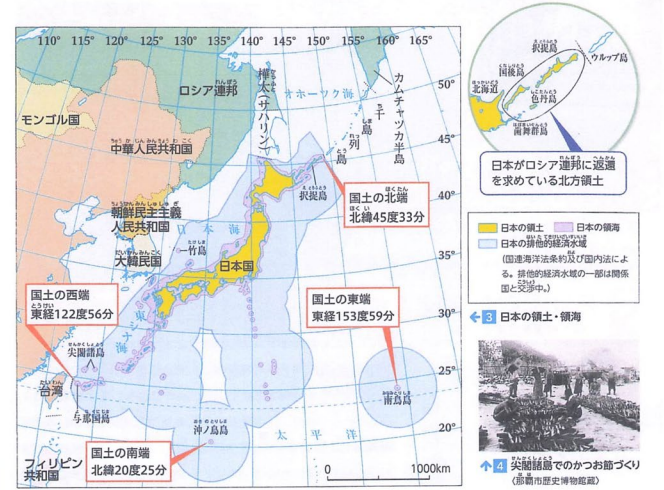
↑ 色丹島での海苔づくり(1935年ごろ)
(公社 半島産業振興局 島根県歴史資料館提供)

の返還を求めて交渉を重ねていますが、返還はいまだに実現していません。日本は、この問題を解決して平和条約を締結することが必要との考えに立ち、これまでに到達した合意や、法と正義の原則に基づいて、粘り強く交渉を続けています。



↑ 竹島でのあしかがね(1934年)
(大塚朝日新聞社撮影 竹島資料館提供)

日本政府は、これに嚴重な抗議を行うとともに、国際司法裁判所での話し合いによる解決を提案しましたが、韓国はこれに応じず、実現していません。



尖閣諸島(沖縄県)

尖閣諸島は、南西諸島群島に位置する魚釣島・北小島・南小島などからなる島々の総称です。日本は、1885年から現地調査を行い、これらの島々が無人島であり、どの国の領土でもないことを確認したうえで、1895年の閣議決定により沖縄県に編入しました。その後、前掲が本格化し、尖閣諸島に移住した日本人は、漁業やかつお節の製造、羽毛の採集などに従事して暮らしました。

第二次世界大戦後、尖閣諸島はアメリカ軍の占領下におかれましたが、1972年の沖縄県の返還にともなって日本に復帰しました。しかし、尖閣諸島の周辺に石油や天然ガスの埋蔵の可能性があることが指摘されると、1970年代から、中国や台湾が自国の領土であると主張し始めました。その後、中国船が領海に侵入するなどの事件が起こっていることから、日本はこれに抗議し、警戒や取り締まりを強めています。尖閣諸島が日本固有の領土であることは、国際的にも認められており、日本は、尖閣諸島をめぐる、解決すべき領有権の問題は存在しないとの立場をとっています。

課題の解決に向けて

領土をめぐる課題は、それぞれの国の主権に関わるもので、対立につながることもあります。また、政治・経済・歴史なども関わり、解決は容易ではありません。武力に頼ることなく、対話と法に基づいて、平和的に解決することを目指していくことが重要です。一方で、東アジアの国や地域の発展にともない、相互の交流はますます活発になっています。環境問題などの課題の解決のためには、各国が国境を越えて協力し合うことが求められています。

TRY

- ① 日本の領土をめぐる問題について整理しよう。
- ② 日本は周辺国とどのような外交を進めているのか調べよう。

2. 北方領土の語り部

千島連盟では、児童・生徒に北方領土問題をより深く理解してもらうため、「学校の総合的な学習の時間での北方領土学習」「北方少年少女塾」等へ、「北方領土の語り部」を派遣しています。



3. 語り部の話を聴き、対話する中で、子どもたち（児童・生徒）の印象に残るエピソード

(1) 貴重な自然・豊かな水産資源とともに人々がいきいきと暮らした四島での生活の様子



3. 語り部の話を聴き、対話する中で、子どもたち（児童・生徒）の印象に残るエピソード

(2) ソ連兵の上陸

- ・土足で民家に上がり込み貴金属製品などの略奪
- ・銃を突きつけられるなどの威嚇



-16-

(3) 自力脱出

- ・気象状況の悪い日やソ連兵の監視が手薄になる深夜、漁槽にすし詰め状態で生きるか死ぬかの緊迫した船内の様子
- ・海が荒れ船が転覆して亡くなった島民たち



-18-

3. 語り部の話を聴き、対話する中で、子どもたち（児童・生徒）の印象に残るエピソード

(4) 強制送還

- ・タラップのないソ連の貨物船にモッコで吊られ荷物のように船槽へ
- ・排泄物処理もままならない劣悪な船内環境
- ・船内で亡くなった人は海へ「水葬」
- ・北海道へ行くと思っていた船は樺太へ
- ・樺太の真岡(ホルムスク)の収容所での過酷な生活。多くの幼児・高齢者が飢えと寒さで死亡、死体が増えるとトラックで運ばれ、どこでどう葬られたのかも分からない
- ・迎えに来た日本船で帰航中に死んだ我が子を生きているように装って函館まで連れ帰った母親



※イメージ画像



4. この臨場感は元島民でなければ伝えられない



千島歯舞諸島居住者連盟根室支部

第57号

令和7年11月発行

広報委員会

委員長 原田純子

・子どもたちが「なぜ元島民がこんな経験やつらい思いをしなければならなかったのか？」という疑問を持ち、自ら北方領土問題への探求を深めていってくれたら、将来の啓発活動を担う「コア人材」の育成に繋がると考えます。

・国民へ広く啓発活動を展開することはもとより、これからは「コア人材」の育成にも注力していかなければ、記憶の継承が立ち行かなくなる危機感を抱いています。

・谷内紀夫国後島民の会会長からお話があった『(仮称)ナショナルセンター「北方領土・知の拠点」構想』の「後継者育成・北方領土学習機能」においても、「コア人材」の育成は必須の課題であると考えます。

高校生が学び・見て・考える北方領土

北海道札幌西高等学校3年生の高橋孝明（こうめい）さんは、北海道の「北方領土サポーター」として活動されています。

高橋さんは、「第40回北方領土を考える高校生弁論大会」に応募するにあたり、「現場を見て語る」ことが何より重要だと考え、10月30日（木）夜行バスに乗って根室を訪れ、納沙布岬から北方領土を視察、その後、二・ホ・ロで角鹿泰司根室支部長との意見交換を行った後JRで帰札、原稿を仕上げました。



角鹿支部長と意見交換する高橋さん

高橋さんのように、北方領土のことを深く学び、現地を見て、考えられている高校生がいることは、とても嬉しいことです。今回は、高橋さんへのインタビューをお届けします。

【質問1】北方領土問題に関心を持つようになったきっかけは？

高校生になってから北方領土に関する活動を細々と取り組んでいく過程で、領土返還に関する意義を考え始めたことで、徐々に関心を持つようになりました。特に、高校3年生になり、岩下明裕教授の北方領土について記した本を読んだ時から、より一層考えるようになりました。

【質問2】実際に納沙布岬から北方領土を見て、どのように感じましたか？



高橋孝明さん

【北海道札幌西高校3年生】

一番は不自然さを感じました。

目の前に島が見えているのにその内側で起こっていることがわからない、関係が全くないことに違和感を覚えました。そこにいるのがロシアの方でも日本の方であったとしても断絶されていることが隣人としておかしなことだと思いました。

【質問3】現在、北方領土問題を次世代にいかにか継承していくかが課題となっています。若い方々に対し今後どのような機会づくりや啓発活動が有効と考えますか？

私の場合に当てはまるので、多くの若い方々に共通するかは分かりませんが、大切なのはこの領土問題が複雑であることを知ることだと思います。関心を持つ前までは日本が正義でロシアが悪というふうな二元論で考えていましたので、結論が出ていて自分たちがすることはもう何も無いと思っていました。しかし、実際はもっと複雑ということが外交面や国境学の視点から分かりました。私たちにまだ考える余地が残されており、北方領土問題をどう考えるかは人それぞれなので、自分自身の考えを持とうと思ひ、関心が芽生えてきました。なので、有識者の考えを聞くのと同時に意見をぶつ合う場を整えるのとよりいいと思いました。

ありがとうございました。「高校生弁論大会」よい結果となりますように！

5. 「元島民の体験証言及び応答装置」の必要性

戦後81年が経過し、元島民の平均年齢は90歳を超え、次世代への四島の記憶の継承がますます困難な時期に差し掛かってきています。

今後、確実に到来する「元島民がいなくなる時代」を見据え、新たな伝承の手法として、AI(人工知能)やVR(バーチャルリアリティ:仮想現実)などのデジタル技術を活用し、元島民の実体験や四島への想いを的確に後世に伝える取組を進める必要があると考えます。

「被爆者証言応答装置の製作」について広島市平和推進課へ聞き取り

応答装置の画面表示例



(左から:笠岡さん、切明さん、内藤さん、八幡さん、山本さん)

応答装置のインターフェイス(操作画面)の例

広島市HPより

●装置について

利用者の質問内容に含まれる単語などをAIが認識し、事前に録画した被爆者のインタビュー映像から適切な答えを選んで再生する仕組みで、個人の被爆体験に焦点を当て利用者が対話形式で掘り下げること、原爆被害を多面的に伝えるもの。対話形式により被爆の実相を次世代に正しく伝えられるよう留意した。常設型2台、可搬型3台製作



「被爆者証言応答装置の製作」について広島市平和推進課へ聞き取り

●撮影について

85～95歳の5人の被爆体験証言者に、一人当たり半日×3回の撮影に協力いただき、200問を超える一問一答形式のインタビュー映像と、30分程度の証言ビデオを高画質・高音質で収録

●質問リストについて

小・中・高校生、他の自治体に蓄積されたもの、広島平和文化センターの職員等から集約した600を超える質問を、時系列順に4つのカテゴリーに分類し、内容を精査

●運用について

広島市平和記念資料館を訪れる修学旅行生等の平和学習に供することや、可搬型のものを用いた出張体験会を実施することを想定している。

R8年度は広島市内の学校等において試行を重ねながら精度向上を図り、R9年度運用開始予定

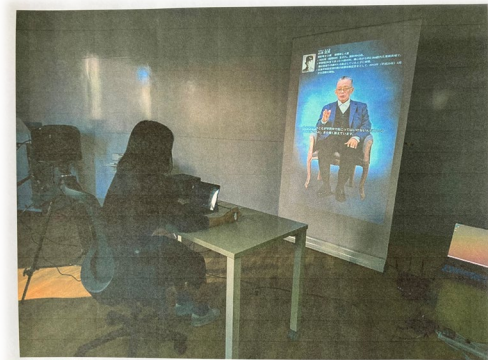
●事業費について

R7年度 6,820万円 内訳:(1)製作・撮影2,420万円(2)システム構築3,558万円(3)展示機材842万円
R8～12年度(5年間の長期契約)AI技術の向上550万円(単年度110万円)

●苦労している点

(1)実際の運用について、デジタル技術の凄さだけが際立ち、面白がられて終わってしまう恐れ。「なぜ導入したか」その意図を説明するステップが必要。

(2)AIの精度について、高いレベルで応答できると認識しているが、「広島弁」など質問する利用者の訛り(なまり)によつて的確な回答ができるか検証しきれていない。



体験会の様子

広島市HPより

6. 「実相」を知り、「対話」することで隣接地域の活性化を

根室管内においても「元島民の体験証言及び応答装置」を導入し、原点の地である根室市内施設に常設型を設置するとともに、管内各施設・学校において可搬型を活用・展開することにより、啓発活動の次代を担う世代が、探求へ向かう気づきを生む機会づくり、さらには、「施設間の連携」や「効果的な集客促進」にもつながると考えます。



- ・現在、根室管内の元島民「北方領土の語り部」は9人(うち根室市7人)、年齢は84～92歳。
 - ・残された時間はわずかであり、撮影・収録作業だけでも進めていけたらと切望しております。
- ご検討の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。



チシマフウロ